

# 泉鏡花にみる短篇小説の方法

安 藤 幸 輔

短篇小説の方法を、泉鏡花の作品を中心として考えてみたい。対象とするものは「夜行巡査」(明治28)「外科室」(同)

「海城発電」(明治29年)「化銀杏」(同)「高野聖」(明治33)

「歌行燈」(明治43)である。

これらの作品を対象とする根拠の第一は、何らかの意味で泉鏡花の代表作とされているものであること、第二に短篇小説としての条件を備えたものであること、からである。

もっとも「化銀杏」以下の三篇については、長さの点から考えてにわかに短篇小説と呼ぶことには異論があるかも知れない。だが、しばらく短篇小説として考えてゆきたい。論が進むにつれてそのことも自ら明らかになってくるように思われる。

## 1

周知のように、小説は「人物」「事件」「背景」の三要素によって構成されており、短篇小説の場合は、それぞれが独立して「小説の効果」となるような原則があるのも、すでに認められているところである。(注1)

鏡花の作品を考える場合も、右の三要素のそれぞれが、どのような特徴をもっているか考えることが、そのまま鏡花の小説の方法をみることとなり、ひいては鏡花の文学世界にアプローチすることともなろう。

鏡花作品に描かれた人物は、どのような特色をもっているか。

人物を考える場合には、まず、その職業が考えられねばならない。人物は、職業を通して、自己以外の外界と接触しているものであり、自己との、対立、抵抗、調和など、いわゆる「生活」を営んでいるからである。文学に描かれる人物は、その自己の「内面世界」と、その人物を圍繞する「外界」との交渉によって生じる葛藤（生活）を具現している人物であるはずである。従って、作品の主人公の職業は、単に職業であるに止まらず、主人公の対社会的な内面生活が、それに籠められているということが出来る。これを作者の立場にたつていえば、主人公の職業を決定することが、ほとんど作品の意図を示したということになるだろう。いうまでもなく、職業は、人物のすべてではない。しかし、人物の、性格や心理は、職業による制約を大きく受けるのは否定できないし、その人物の行為によって生じる「事件」も、また職業と無縁ではあり得ない。当然のこととして、その人物が生活し、行為する「背景」とも、深い関わりがあることになる。職業を考究することが、文学世界の本質を究明するための、効果的な方法であることは、みのり豊かな研究がなされている事実によっても肯くことができよう。（注2）

さて、鏡花の文学世界に登場する主要人物は、どのような職業についているであろうか。これを本稿で考究の対象としている作品に限って、左に図示してみよう。（後に関連があるので「背景」と事件もついでに表にしてみる）

左の表で気がつくことは、主人公が女性である「化銀杏」と「高野聖」を除いて、主人公と目される人物が、一つの共通点をもっていることである。それは、社会通念からみると、すべてが特別な職業と考えられることである。ここで、特別という意味は、一般社会の通念で理解できない、生活感覚やモラルや秩序の中に生きる職業である、ということである。

「夜行巡査」の八田義延は、題名の示す通りに△巡査▽という職業についている。△巡査▽は、国家あるいは中央官庁に直属していると考えられており、市民生活を暴力や悪行から守る存在である。だが、これは市民と同じ生活感覚やモラルを持っているのではない。それどころか、社会秩序という名で、市民より上に位し、市民階級を支配する存在である。彼自身が市民階級の出身であるかどうか、日常の現実生活が支配階級とは呼べない貧しさにいるかどうか、そうしたことには関わりなく、彼の△巡査▽という職業は、その意識においても生活感覚においても、市民を支配し、市民の上に位している、支配階級そのものである。彼は支配階級の末端に連なっており、代弁者であり、代行者でなければならぬ。

『こう爺様、お前何処だ。』と職人体の壮校は其傍なる車夫の老人に向ひて問懸けたり。車夫の老人は年紀既に五十を越へて、六十にも間はあらじと思はる。餓へてや弱々しき聲の然も寒さにおののきつつ、

杏 銀 化			電 発 城 海			室 科 外			巡 行 夜			作 品			
西岡時彦	水上芳之助	お貞	(じょんべるとん)	柳李花	海野	神崎愛三郎	(予)	看護婦	貴船伯夫人	高峯医学師	(作者)	お香の伯父	お香	八田義延	人 物
教師	(少年)	(人妻)	従軍記者		軍夫	赤十字看護員	画 家			医 師				巡 査	職 業
男	男	女		女	男	男	男	女	女	男		男	女	男	性 別
36	16	21		16 ~ 19	38 ・ 39	21 ~ 27			26 ~ 28	30 ~ 32		50 ~ 60	19 ~ 21	23 ~ 25	年 令
		夜・宿屋の一室				夜・中国の家の一室				昼間・外科室				真夜中・お濠端	事件のある時・所
安楽死		狂気		強姦死					自殺	自殺				溺死	事 件

歌 行 燈						高 野 聖				(作者)		
(袖Ⅱ三重)	(喜多八)	(惣市Ⅱ宗山)	三 重	辺見秀之進	恩地喜多八	恩地源三郎	親 仁	葉売り	白痴		女	宗 朝
	門 附	按 摩	芸 妓	小鼓方	能楽師	能楽師		葉行商		(医者・魔性)	行脚僧	
女	男	男	女	男	男	男		女	男	女	男	
16	24	40 ~ 50	20	78	28	63			22 ~ 23	28 ・ 29	20 ~ 26	
		夜・二階一室			夜・旅館の門	夜・旅館の一室					夜・山中の一軒家	
		憤 死			病死(?)	話		馬に変身			夢幻の経験	
		暁闇・山の麓の原										

(注) 「人物」で「歌行燈」の( )内は、△思い出▽の中のものである。他の( )は、作品の意図からみて必要な人物ではあるが、作中人物として独立した人格を要求されていないもの。「年令」で△23~25▽という書き方をしたのは、作中では年令が明瞭に示されていないが、内容から類推できるおよびそのもの。「事件」は、その人物の上に行ったものであって、しかも△作品効果▽をあげるのに役立つに限っているものに限ってある。

『何卒真平御免なすって、向後屹と氣を着けます。へいへい』

とどきまぎし慌て居れり。

『爺様慌てなさんな。こう己や巡查じやねえぜ。よ、おい、可愛想に余程面喰ったと見える……』

「むむ、左様だろう。氣の小さい維新前の者は得て巡的を恐がる奴よ……」

「汝が商売で寒い思ひをするからたつて何も人民にあたるにやあ及ばねえ。糞！ 寒鴉め」

こうした感覚は、△巡查▽というものを、特別な存在だと考えるところからきている。だから一般市民の理解を超える行為があつても、それを認容することになつてしまふ。

多少の不審と不満はありながらも、一般社会の現実とは異なつた△別世界のもの▽として、受け止めることになる。まして、それが△職務遂行中▽である場合にはなおさらのことであらう。

「外科室」の高峰が△医師▽であることも、同じような意味をもつことになるだろう。△医師▽は人命をあずかるものであり、市民から尊敬と信頼を受ける存在である。それは、市民階級を支配している階級とみられる貴族でさえ、△医師▽の尊厳と権威とは侵すことができないものである。彼がどのようなモラルに生き、生活感覚をもっているかは、明瞭なかたちでは誰にも理解できない。しかも、この作品のよう

に、手術の執刀を担当する△医師▽の行為や考えに對しては、何らの疑惑をもさしはさむことはできないだろう。

「海城発電」の△赤十字看護員▽あるいは△軍夫▽の場合には、前二者よりは更に一般の通念で理解を超えるものといふことができる。△軍隊▽がすでに、一般社会の現実とは、隔離され、遊離した△別の現実▽なのであり、この作品の場合のように、国家間の戦争が行なわれているのであれば、△看護員▽や△軍夫▽のモラルや意識は、ほとんど一般社会の理解を絶したものとなるだろう。

「歌行燈」の主人公が△能楽師▽であることも、別の意味でまた一般社会通念では、ほとんど律することはできない△別世界▽の存在ということになるだろう。△能楽師▽の生きている世界では、どのようなモラルで秩序が保たれるのか、どのような生活をしているのかが、一般に知られることは少ない。△芸人▽という存在が、かりに好奇心や憧憬のかたちをとっていたにせよ、逆に△河原乞食▽という軽侮のかたちをとるにせよ、別の世界に生きる△異人種▽のようにみえたことは確かなことのように思われる。

ところで、主人公たちの職業が、現実から隔離された世界のものであり、一般社会では理解できない存在であることは、視点を變えてみれば、一般社会との接触を拒絶した世界に生きているということになる。ふつうの意味での△社会生活▽が行なわれていないということである。初めに述べたよ

うに、△生活▽とは、△個人▽と、それを圍繞している△外界▽との、対立、抵抗、調などを意味するものであるとしたら、主人公たちには△生活▽がないということとなるだろう。主人公は、自分だけの世界に息づいていて、自分以外の外界と連なることはない。話し、息づき、行為するすべてのことが、自分だけの世界であり、自分以外の人物といつても、つまり自分と同じ生活圏にいる人たちとしか接触しないのである。これは、△外界▽である一般社会からみれば、△閉ざされた別世界▽ということであり、主人公たちからみれば、△外界▽に対して、本質的には、いかなる意味においても、働きかける必要もないし、また、その必要がないということである。

ところが、同じような存在として、「化銀杏」と「高野聖」の女主人公が考えられる。二人とも、独立した人格として社会参加をする条件である△職業▽をもっていない。しいていえば△人妻▽である。いうまでもなく、社会に連なることのできる存在ではなく、△家▽あるいは△夫▽の一部分に過ぎない。このことは、彼女が、社会から隔離された△特別な世界▽に生きていることであり、一般社会は、彼女がどんな生活意識をもち、どのようなモラルで暮しているかを、知ることはできないし、また必要もないことである。そもそも一般社会は、彼女の世界に関心を払うこともないといつてよい。こう考えてくると、鏡花の文学作品の主人公（女主人公）

に共通しているのは、一般社会から遊離した、あるいは隔離された、△別の世界▽に生きる人物であるということができ。もし一般社会を△現実世界▽という言葉で表わすとすると、△非現実世界▽ということができるとし、主人公たちの世界とて、まぎれもない文学的現実世界だということになれば、△もう一つの現実世界▽といつてもいいだろう。

## 2

鏡花の描いたこれらの人物たちは、彼らが行為するため、それにふさわしい背景（時・所）を与えられていることにも注意する必要がある。そして、「人物」がそうであったように、「背景」にも、ある共通した特徴をみることができようである。

特徴の一つは、「外科室」を除くすべてが、△夜の時間▽であるということである。もう一つは、「夜行巡査」を除くすべてが、△閉ざされた室▽か、△人里離れた一軒屋▽という場所であるということである。これは、何を意味するであろうか。△夜▽から考えられるのは、当事者以外の第三者から、明瞭に認識されない状況にあるということである。これは、そのまま△閉ざされた室▽△人里離れた一軒屋▽とい場所は、そのまますべてである。そういう背景の意味するところは、△当事者▽の言動が、△第三者▽から認識されにくい結

果、△当事者▽は自分以外のどのような存在に対しても、氣をつかう必要がないことになり、自由に、自己の△内面世界▽をここでさらけだしてみせられるということになる。これを作者の立場から言い変えてみれば、作者は、自分が意図した人物像を、純粹に、典型的に描くことができる、ということである。それが、△外界▽との關係からみれば、不自然であり、誇張され過ぎて、真实性が薄くなる恐れがあるはずのところ、△外界▽との接觸を遮断したために、誇張や不自然さも、その人物の△内面世界▽を典型的に、効果的に示すことができる、ということになるだろう。

「夜行巡查」の△八田巡查▽は、△真夜中▽の△お濠端▽をパトロールするが、△第三者▽が介在する余地がないために、完璧なまでの△巡查の典型▽として行為し、事件を起こすことができる。つまり、△現実世界▽では、誇張に過ぎ、不自然であってリアリティのないことも、△真夜中▽の人っ子ひとりない△お濠端▽であるという設定によって、逆に効果的となることができるのである。

「外科室」の背景も、文字通りに△閉ざされた一室▽である。空間的に、△当事者▽と△外界▽とが遮断されているだけでなく、心情的にも、意識的にも、△外科室▽は、△外界▽からの觀察も干渉も許されない状況となっていることに注意する必要がある。△貴船伯夫人▽が、△高峰医学士▽のメスで、自分の胸をつくという行為も、不自然にみえないの

は、△第三者▽の批判を拒絶している△閉ざされた室▽のためである。

「海城発電」も同様に△閉ざされた室▽であり、また、日本本土からも隔絶されているという大状況も加わり、すでに「人物」のところでも触れたように、△戦争中▽であるという状況が、更にもう一つの条件となって、△当事者▽と△外界▽とを、二重三重に隔絶していることになる。

「化銀杏」の女主人公お貞も、△自宅の一室▽という限られた空間の中だけで生き、夫を安樂死させるということも、当然のことながら△夫と二人だけの室▽であり、狂気になっているところも、△薄暗い一室▽であり、行燈の灯を消しにくるのも△真夜中▽である。

「高野聖」の舞台は、人里離れた飛弾の山中の△孤家▽である。それも洪水によって、部落の家は残さず流されてしまいい、一村の人畜はすべて死滅したということになっている。しかも、この△孤家▽は、十三年前に人里から全く交渉を絶っている。たまたま、ここに辿りついた行脚僧にしたところ、道に迷った上に、「大蛇」に氣絶寸前の危機を感じた、△体中珠数生になったのを手当次第に掻い除け抄り棄て、抜き取などして、手を挙げ足を踏んで、宛で躍り狂う形で行くことで、やっと「山蛭」の襲撃を避けたりという、いのちがけの冒険の末のことである。この△孤家▽が、すでに現実社会から隔絶されているだけでなく、出来事は、△闇▽

の中で展開されることになっている。作者は、どのような  
△非現実的な△人間でも事件でも、△外界△の何を何ら考  
慮することなく、自由に描くことができることになる。

「歌行燈」も、喜多八と按摩宗山の争いの場は、△夜△の  
△妾宅の二階一室△であり、憤死した宗山の娘三重と喜多八  
が芸を授受するところは、△晝闇△の△鼓ヶ嶽の裾にある、  
雑木林△である。

このようにみてくると、それぞれの作品のニュアンスは異  
なっているが、△夜△であり、△闇△の時間であり、△閉ざ  
された空間△であって、△外界△と交渉を持つ必要のないと  
ころであるということになる。

さて、私たちは、鏡花の文学世界に登場する「人物」が、  
一般社会の通念を拒絶し、日常的現実的な生活感覚やモラル  
で律しきれない、△特別な世界△に生きるものであること  
を、その特別な△職業△のもっている意味から理解した。ま  
た、それらの「人物」の行為する背景が、△夜△の時間△と  
△閉ざされた空間△であることから、いわゆる一般社会の  
目、つまり△外界△から隔絶された状況あることを考えてき  
たつもりである。そして、そのことは、作者が意図した作品  
の効果をあげるために、「人物」「背景」が△純粹な典型△と  
して、不自然でなく設定されているということも理解した。  
これは、「人物」の△内面世界△を描くのには、社会通念によ  
る生活感覚やモラルを無視できることであつた。こうして、

作者の人生観・世界観・美意識などを、純粹に、直接的に  
「人物」に具現させることができた。

ここで、くだくだしく繰り返してみたのは、鏡花の作品に  
みられる「事件」を考えるためなのである。

### 3

ここで考えたい「事件」というのは、作品を構成する上  
で、どうしても欠かすことのできない「出来事」という意味  
である。あるいは、作者の意図した効果に、著しい影響を与  
えている「出来事」と考えたい。あるいはまた、主題を考え  
る上に、どうしても無視することのできない「出来事」とい  
うように理解しておきたい。

前掲の表をみても分るように、「高野聖」を除くすべての  
作品は、△死△が中心的な「事件」となっている。「夜行巡  
査」では、泳ぎを知らない主人公が、自分の恋人のお香の伯  
父を救うために、お濠へとびこんで△溺死△するのであり、  
「外科室」では、意中の人である高峯医学士に手術を受ける  
寸前に、女主人公貴船夫人は、「高峯が手にせる刀に片手  
を添へて、乳の下深く搔切り」て△自殺△している。「海城  
発電」では、主人公神崎愛三郎の人格や生きかたを示すため  
に欠かせない「事件」として、中国娘の李花が△強姦死△し  
ている。「化銀杏」も、お貞が狂気になって行燈を消して歩



く原因となったものとして、夫の西岡時彦の△安楽死▽が中心的事件となっている。「歌行燈」では、三重を接点として、二つの物語がクライマックスのところでも重層的效果を挙げることが、そのために三重の父である按摩の宗山が、△憤死▽していなければならないのである。初めに述べたように、「高野聖」には、こうしたかたちでの△死▽はない。しかし、富山の薬売りが、女主人公の魔力によって馬に変身させられるのも、△人間としての死▽と考えられる。しかも、作品の効果も、△人間に、著しく役立っているということが出来る。主人公の宗朝も同じ運命にあったのであり、そのことは作品にリアリティを与えることの重要な条件の一つとなっている。

「地体並のものならば、嬢様の手が触って那の水を振舞はれて、今まで人間で居よう筈はない。……お前様それでも感心に志が堅固じゃから助ったやうなものよ。何と、おらが曳いて行った馬を見さしたろう、それで、孤家へ来さっしゃる山路で富山の反魂丹売に逢はしたといふではないか、それ見させい、彼の助平野郎、疾に馬になって、それ馬市で銭になって、銭が、そうら、此の鯉に化けた」ということでも理解できる。

それでは、△死▽はどのような意味を持っているであろうか。

先ず構成の上からみて、△死▽は作者の意図(主題)を導きだす条件、あるいは材料となっていることに気づく。「夜

行巡查」の八田巡查は、自分の恋を妨げている「殺したいほどの老爺だが、職務だ!」として、お濠に落ちたお香の伯父を救おうとする。泳ぎを知らない自分が溺れることを承知の上でのことである。これに対して、「後日社会は一般に八田巡查を仁なりと称せり。ああ果して仁なりや、然も一人の渠が残忍苛酷にして恕すべき老車夫を懲罰し憐むべき母と子を敵責したりし尽瘁を、讚歎するもの無きはいかむ」と、作者は自己の意図を説明する。同様にして、「外科室」の貴船伯夫人の△自殺▽と高峯医学士の△後追い心中▽死についても、「語を寄す天下の宗教家、渠等二人は罪悪ありて、天に行くことを得ざるべきか」といい、作者の意図がどこにあるかを強調している。また、「海城発電」では、心を通わせていた李花の△強姦死▽を目前した神崎愛三郎を描いてみせ、その観察者である従軍記者じょん・べるとんの電文をかりて、「日本軍の中には赤十字の義務を完うして、敵より感謝状を送られたる国賊あり。然れどもまた敵愾心のために清国の病婦を捉へて、犯し辱めたる愛國の軍夫あり」と、作者の意図を明らかにしている。

以上の三作が、いわゆる「観念小説」と呼ばれる理由もここににあるのだし、△死▽が極めて効果的な条件となっていることも確かである。

だが、果して△死▽は、それだけの意味しか持ち得ないであろうか。「化銀杏」「高野聖」「歌行燈」の△死▽とは、意

味するところが、自ら異っているのであろうか。「夜行巡査」(明治28)「外科室」(同)「海城発電」(明治29)は、日清戦争を頂点とした△社会状況▽に作者が刺激され、影響された結果としての作品であつたらうか。そして、「化銀杏」(明治29)は、鏡花の文学世界が真に開花する過渡的作品であり、「高野聖」(明治33)「歌行燈」(明治43)は、「外科室」以下の、いわゆる「観念小説」と、方法的にも内容的にも異質のものであろうか。作者の創作態度が、「化銀杏」を挟んで、異同がみられるというのであろうか。私は、そうは思わない。△死▽の意味は一貫して変らず、鏡花の文学世界は、本質的に変化していないとみる。方法的にも、内容的にも、作者の創作態度にも、変質は認められない、と私は考える。それぞれの作品にみられる、△死▽をもう一度考えてみよう。

「夜行巡査」の八田巡査は、すでに引用した部分でも明らかのように、△自己の職務▽のために死ぬのであり、作者の言葉をかりれば、「あはれ八田は警官として、社会より荷へる処の負債を消却せむがため」に死ぬのである。

ここで、巡査という△職業▽がどんな意味をもつものであつたか、すでに本稿で考察したところのものを、想起していただきたい。職業に△巡査▽を設定したことは、一般社会の通念では律することのできぬ△別世界▽であり、一般社会でのモラルや生活感覚では理解できない△閉ざされた世界▽であつたはずである。更に、△夜の時間▽△閑ざされた一室▽△人

里離れた一軒屋▽という背景であつたことも、ここで想起する必要がある。そうなると、△死▽の意味は自ら明らかとなつてくるように思われる。

八田巡査が、自らの△職務▽のため死ぬことは、作者の説くように、「社会より荷へる処の負債を消却せむがため」ではない。作者の説明は説明として、作中人物の行為や思想や感情の必然としての△別の死▽がなければならぬ。作者が描いた「人物」であるが、作品の必然性として、作者の手をはなれた生きかたを、「人物」はしているはずである。もし、作者の意図し、説明した通りの「人物」でしかないならば、そこに作品の鑑賞も批評も存在し得なくなるだろう。作者の説明だけで、読者あるいは評者は拱手し、それに従っていないければならない。だが、そんなことはあり得ないことである。「夜行巡査」の場合とて同じである。作者の説明に関係なく、△八田巡査▽は、自らの△内的必然▽によって△死▽を選んだのである。それは何か。△職務▽に徹することである。肉体的生命は捨てることになるが、自らの△内面世界▽に十全に生きるためである。これを逆に考えてみれば、更に明瞭なこととなる。すなわち、お香の伯父が死に、八田巡査が、その死を拱手してみていた場合である。八田巡査は、自らの世界としていた巡査の△職業▽から、自分自身を自分の手で葬るか、別の力によって葬られなければならない。彼が△巡査▽の職から、本質的な意味においても、形式的な意

味でも離れることは、彼の△全き死▽を意味する。彼は肉体的に生きたとしても、もはやいかなる意味において、死んでしまうことになる。こうして、彼は、△肉体的な死▽を選ぶことによって、真に充実した自己の△内面世界▽に生きようとしたのである。こうしたことは、△車夫▽や△婦人▽に対する、完全な△職業▽的な行為にもみることができ、恋人お香と伯父の後から極めて△職業▽的にパトロールすることの必然性を、読者に納得させずにはいない。くだくだしく述べたが、彼の△死▽は、自己の△内面世界▽を△外界▽から守り、また、そこに十全に生きることの意味していた、と私はいいたいのである。この△内面世界▽は、△巡查▽という職業の、そもそもの本質的な意味がそうであったように、社会通念としてのモラルも生活感覚も、拒絶している世界なのである。

同じようなことは、「海城発電」にもいえる。ここでは、李花の△死▽が、赤十字看護員神崎愛三郎の△内面世界▽を明瞭にする意味を持っている。神崎の眼前で、心を通わせていた清国の少女が、海野をはじめとする軍夫たちによって犯され死んでゆくが、神崎は、これを救うことができなかつたのではない。しかし、彼は救わなかつた。彼は、赤十字看護員としての△職務▽に生きるためには、李花の△強姦死▽を座視せざるを得なかつたのである。これは、彼が誰からも侵されたくない△内面世界▽なのであり、ここに生きる以外に

自分の世界は存在しないと信じたためである。だが、李花の△死▽は、ひとり赤十字看護員の△内面世界▽だけを示しているのではない。これは△軍隊▽というもの、△戦争▽というものの持つ世界を明瞭にしている。これもまた、一般社会の通念では律することのできない、大きな△閉ざされた世界▽であり、△外界▽を拒絶した△内面世界▽ということができる。この世界に生きるしか、軍夫は生きることができないし、△職務▽に生きるしか神崎は方法をもたないのである。

「外科室」の貴船伯夫人と高峯医学士の△死▽も同様である。社会的秩序やモラルでは律しられない、△愛▽という名の△内面世界▽に生きることが、肉体的な△死▽とひきかえにして獲得することのできた唯一の△世界▽であった。「化銀杏」は、夫を△安楽死▽させることによって、お貞は△外界▽から隔絶された△閉ざされた世界▽に自ら追いこむ。すでに触れたように△人妻▽は夫の附属物であり、社会に対して何らの発言権もないし、存在は無視されている。しかし、彼女が生きるためには、△夫▽が必要であり、△貞淑▽であることが必要である。そのためには△離縁▽されてはならぬ。もし△離縁▽されたとしたら、それはそのまま△死▽を意味してしたのである。彼女は単に△離縁された女▽であるばかりでなく、一般社会に生きることがもとより、自分自身の△閉ざされた世界▽に生きることさえできないのである。

(念のため断っておくが、これは「化銀杏」において、そのように描かれているのであって、私が自分の意見を展開しているのではない)お貞は、△離縁▽よりは夫の△安楽死▽を選び、ついに△狂気▽という、完璧な△内面世界▽の中に生きることを求めることになる。

「吾を見棄てるか、吾を殺すか、うむ、何方にするな。何でも負債を返さないでは、余り冥利が悪いで無いか。

いや、ないか処でない! さうしなけりや許さんのだ。

うむ、お貞、何方にする、殺さないと離縁する」といと敵かに命じける。お貞は決する色ありて、「貴下、そ、そんなことを私にいつてもいいほどのことがあるんですか」声ふるはして屹と問ひぬ。「応、ある」と確乎として、謂ふ時病者は傲然たりき。お貞は……俄然、崩折れて、ぶるぶると身震ひして、飛着く如く良人に縋りて、血を吐く一声夜陰を貫き、「殺します! 旦那、私はもう……」とわつとばかりに泣出しざま……勝手元の暗を探りて、渠は得物を手にしたり。時彦は、……いとも静かに、冷やかに、着物の袖も動かさざりき。

お貞は、こうして、夫の時彦を△安楽死▽させ、△狂気▽という、△外界▽を遮断した△内面世界▽にこもることで、生きることができたのである。社会にとって、あるいは他者にとって△狂気▽がどんな意味をもっていようが、それはお貞にとっては何ら関知しないことなのである。

以上の「夜行巡査」「外科室」では、主人公の△死▽は、△外界▽を遮断することによって、自らの△内面世界▽に十全に生きるための必然の帰結であり、△海城発電▽「化銀杏」でも、共に相手の△死▽によってではあるが、前二者と同じような意味を、その△死▽にみる事ができた。しかし、もう一つの意味も汲みとれないわけではなかった。つまり、主人公たちの△内面世界▽であるとともに、主人公たちが身を置いていっている状況をも示している。△海城発電▽における△戦争▽△戦地▽という背景が、一般社会という△外界▽と隔絶した、より大きな△内面世界▽ともいうべき意味をもっていることであり、△化銀杏▽も同様にして、△妻の座▽△女の地位▽という、一般社会からは無視され、一般社会という△外界▽から隔絶された△内面世界▽をも重層的に示していることにほかならなかった。

「高野聖」も「歌行燈」にみられる△死▽も、一般社会と隔絶された△別世界▽を設定するという意味をもつ。これまで考えてきた「夜行巡査」以下の四作品が、「人物」の内面世界の設定に役立ってきたのに対して、「高野聖」と「歌行燈」の二作は、「海城発電」「化銀杏」にもみられた一側面の、△外界と隔絶された状況▽を設定する意味がある。これは一般社会の現実とは別の△非現実世界▽ととってもいいし、主人公が身を置いている△内面世界▽ということもできる。すでに触れたように、「高野聖」の△死▽は、葉売りの

△馬への変身▽であり、これはここに登場する人物の行為や思念、つまり生治を、一般社会とは隔絶したモラルや秩序の中に置き、それに真実性を与える意味をもっている。また、「歌行燈」の△死▽も、主人公でも、相手役の死でもないという点で「高野聖」と同じであるばかりでなく、△能楽界▽という、一般社会の秩序やモラルの通じない△別世界▽を設定する意味も同質であるように思われる。いうまでもなく、この世界に身を置く登場人物たちは、自らの△内面世界▽に安んじて生息できることになる。

これを作者の側に立っていえば、事件や背景設定（プロット）が荒唐無稽であろうと、人物が誇張された不自然さの中であろうと、少しも意に介さなくてもよいということになる。すなわち作者は、現実社会のモラルや常識を拒絶した△別世界▽△非現実世界▽の中で、自己の哲学や美学を、自由気儘に定着できるという確かな条件を手に入れることができたのである。

#### 4

それでは、鏡花の描こうとした△内面世界▽とは何であったろうか。それには、△死▽をどのように描いているかを考えるのが、便利であるように思われる。

結論めいたことを先にいえば、鏡花の作品世界にみられる

△死▽は、△外界▽の秩序やモラルを拒絶した△内面世界▽へ生きようとする時の、主人公の心理葛藤・心理の揺曳・心理の緊張感であるように思われる。それは、△外界▽の秩序やモラルの束縛から逃れようとする主人公の、苦悩のかたちをとったり、逃れ得たと自覚したときの満足と恍惚であったり、△外界▽を無視し、あるいは忘却したときの、自らの△内面世界▽への陶醉というかたちをとったりする。読者である私たちは、そこに感動するのだが、（これも結論めいたことを先にいえば）その感動の根源は、作者の美意識・美学に関わるものであるようである。その「人物」の△死▽が、どのように醜く、辛く、憤りや苦悩に満ちたものであろうとも、私たちの感動は、その人物とともに憤り、悲しみ、苦悩するところからくる感動ではない。いや、むしろ逆に、主人公たちの苦悩や憤りや悲しみが大きければ大きいだけ、その△死▽に魅せられ、陶醉し、讚美し、△死▽を美しいものと考えてしまうのである。

主人公は、△外界▽の秩序やモラルの束縛から逃れるために、死ぬ（殺す）のであり、その場合に△死▽は自己が安心して身を置くことのできる、唯一の△内面世界▽なのである。苦悩し、憤り、悲しむことが大きいだけ、△死▽は大きな喜びであり恍惚であるのは当然である。読者は、ここで作者の美学を媒体として、主人公に感情移入してしまっているのである。

具体的な描写によって、右のことを確かめてみよう。

「国賊！ これで何うだ」

海野はみづから手を下して、李花が寝衣の裾をびりりとばかり裂けり。

あはれ、看護員はいかにせしぞ。

面の色は変へたれども、胸中無量の絶痛は、少しも挙動に露はさで、渠はなほよく静を保ち、除ろに其筒服を払ひ、頭髮ややのびて、白き額に垂れたるを、左手にやをら搔上つつ、卓の上に差置きたる帽を片手に取ると斉しく、肅然と身を起して「諸君」とばかり言ひすてつ。軍夫と……軍夫と軍夫の隙より、真白く細き手の指の、のびつ、屈みつ、洩れたるを、纒に一目見たるのみ。靴音軽く歩を移して、其まま李花に辞し去りたり。恚て五分時を経たりし後は、失望したる愛国の志士と、及び其腕力と皆疾く室を立去りて、暗澹たる孤燈の影に李花のなきがらぞ蒼かりける。

ここで私たち読者が感動するのは、少女李花が軍夫たちによって犯されてゆく過程を見ている、神崎看護員に感情移入をしているからである。李花を凌辱する軍夫たちに対して、神崎とともに憤り、拱手している神崎をも読者は冷静な気持ではみられない。だが、神崎が、飽くまで自己の△職務△に

忠実であろうとして、△李花の死△とひき換えに、自らの△内面世界△の中に逃れ、△外界△を拒絶した生きかたを示すとき△李花の死△は、奇妙な感動として受け止められ、そこに△美△のかたちさえみようとす。このことは、「化銀杏」でも同じであり、(本稿13頁の引用文参照)「夜行巡査」や「外科室」でも同様である。

改めて断わるまでもないと思うが、この感動は、△死そのもの△が持つものではなく、△死へ近づく過程△の中にあるものである。だから、その人物が、他から責められ、苛まれ、あるいは自ら苦悩するといふのであれば、△死△と同じか、それに近い感動を得ることができるよう思われる。そして、ここに作者鏡花の美学があり、創作の姿勢がある、といつていいだろう。

たとえば、「歌行燈」で、三重が責め苛められる部分が、どのようなかたちで△美△となり、△感動△となるかを、三重自身の口を藉りて描写してもらおう。

今しがたも、な、他家のお座敷、隅の方に坐つて居ました。不断ではない、兵隊さんの送別会、大陽気に騒ぐのに、芸のないものは置かん、衣服を脱いで踊るんなら可、可厭なら下げると……私一人帰されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷いめに逢ひました、え。

三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷で衣服が脱げな

いなら、内で脱げ、引剝ぐと、な、帯も何も取られた上、台所で突伏せられて、引窓を故と開けた、寒いお月様のさす影で、恥しいなあ、柄杓で水を立統けて乳へも胸へもかけられましたの。

(十五)

こうした三重の悲しみと苦痛が、次のような美を  
生みだし、感動を喚起するのである。

「あい」

と僅かに身を起すと、紫の襟を噛むやうに——ふっくらしたのが、あはれに寝れた——

頤深く、恥かしさうに、内懷を覗いたが、膚身に着けたと思はるる……胸やや白き衣紋を透かして、濃い紫の細い包、袱紗縮緬飄然と飄ると、燭台に照って、颯と輝く、銀の地の、ああ、白魚の指に重さうな、一本の舞扇。

晃然とあるのを押頂くやう、前髪を掛けて、扇を其の玉簪の如く額に当てたを、其のまま折目高にきりきりと、月の出汐の波の影、静に照々と開くとともに、顔を隠して、反らした指のみ、両方親骨にちらりと白い。

(十七)

そして、これはまた次の描写と照応する。

「お客の言ふこと聞かぬと言うて、陸で悪くば海で稼げって、崖の下の船着から、夜になると、男衆に捉へられて、小船に積まれて海へ出て、月があっても、島の蔭の暗い処を、危いなあ、ひやひやする、木の葉のやうに浮いて歩行いて、寂とした海の上で……悲しい唄を唄ひます。而してお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に響いて、女が恋しうなる禁厭ぢや、お茶挽いた罰や、云って、船から海へ、びしゃびしゃと追下ろして、汐の干た巖へ上げて、巖の裂目へ俯向けに口をつけさせて、(こいし、こいし)と呼ばせませす。若い衆は舳に待ってて、声が切れると、榮螺の殻をびしびしと打着けますの。……空には蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。暗の夜の血池に落ちたやうで、ああ、生きて居るか……千鳥鳴く、私も泣く。……お恥かしうござんす」

と翳すの利剣に添へて、水のやうな袖をあて、顔を隠した其の風情。人声なくして、ただ、ちりちりと蠟燭の涙白く散る。

(十八)

長い引用だったが、美や悲しみが、どのように  
感動に照応しているかが理解できた。こうした  
照応は、「高野聖」にもそのまま見ることが出来る。富山の  
葉売りが、馬に変身(人間の死)させられた事実が、そのま  
ま宗朝の運命であったかも知れないという恐怖(本稿10頁引

用文参照)と照応して、女主人公の夢幻的な△美的世界▽が展開されるのである。

なるほど見た処、衣服を着た時の姿とは違って肉つきの豊かな、ふっくりとした膚。(先刻小屋へ入って世話をしましたので、ぬらぬらした馬の鼻息が体中へかかって気味が悪うござんす。丁度可うございますから私も体を拭きませう)と姉弟が内端話をするやうな調子。手をあげて黒髪をおさへながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを両手で絞りながら立った姿、唯これ雪のやうなのを恠る靈水で清めた、恠う云ふ人の汗は薄紅になって流れよう。

(十六)

「事件」としての△死▽あるいは、それと同じ質の出来事がある意味について考察してきたが、鏡花の文学世界は、△外界▽から遮断された△内面世界▽を造型するものであることが理解できた。しかも、その世界は△死▽を頂点とする△美的世界▽ということができそうである。

5

私はここで、前掲(4頁)の表の( )内の「人物」について一言しておきたい。

「夜行巡査」(作者)「外科室」(予)「海城発電」(じょんべるとん)「化銀杏」(作者)「高野聖」(作者・宗朝の語り口)であり、「歌行燈」は、( )の人物に代るものが存在することがわかる。

これら( )内のものは、主人公の△内面世界▽と、主人公を圍繞する△現実世界▽との接点に立ち、作品によって、それぞれの役割を果しているようにみえる。

「夜行巡査」の(作者)は、次のように作品の意図を説明する。

後日社会は一般に八田巡査を仁なりと称せり。ああ、果して仁なりや、然も一人の渠が残忍苛酷にして恕すべき老車夫を微罰し憐むべき母と子を嚴責したりし尽瘁を、讚歎するもの無きをいかむ。

ここでいう△社会▽は、私たち△読者▽と同一であっていはずである。△一般に八田巡査……▽以下は、読者が自由に考えるべきことであり、作品とは、作者の説明を待たなければ、描かれた世界が理解できない、というのではないはずである。すでに述べたように、作品を鑑賞し、作品世界に感動する自由を読者が持つ限り、作者の説明は何の意味もない。「人物」「事件」「背景」という三要素が、一つの完成した△作品世界▽を造型しているはずであり、それ以外の説明



は無用と考えられるべきだろう。にも拘らず、(作者)が説明しなければならぬのは、なぜであろうか。

私は心急ぐので、ここでも結論めいたものを先に述べておきたい。作者は作品の造型が、真実性(リアリティ)に乏しいとみて、それを補うために説明を加えた、と先ず考えられる。作者は、主人公の八田義延という「人物」に、誇張された不自然さを感じたにちがいない。水泳を知らないのに、「職務だ! 断めろ」と、お香の手を払いのけて濼に身を躍らせる行為や、パトロール中の言動などにも、確かにそれは感じることができる。しかし、私は、それが極めて効果的で、ユニークな「作品世界」を造型していることで、真実性(リアリティ)を害うものでないのを、すでに確かめておいた。だが、鏡花は、そこに真実性(リアリティ)の稀薄さを感じたのであるかもしれない。これは、「外科室」でも、貴船伯夫人が高峯医学士の手のメスで自分の胸を刺す行為や、同じ日に高峯が自刃するということも、確かに不自然であり、リアリティに欠けている。これは諸家の指摘を待つまでもないことである。作者が、それを説明で補ったと考えるのは自然である。(ここから「観念小説」などという概念を引きだすのを、私は採らない。これまで述べてきたことから、そのことは理解できよう)作者が、リアリティを気にしたこととは、「高野聖」の構成をはじめとして、宗朝の語り口や、語っている旅館の使い方でも十分立証できることである。これ

については、坂本浩氏のすぐれた指摘がある。(注3)

第二に、小説作法の未熟さに由来することも考えられる。

これは「夜行巡查」「外科室」に特にいえることである。

同じようにみえる「海城発電」を別に考えたのだが、その理由は、

予は目撃せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完うして、敵より感謝状を送られたる国賊あり。然れどもまた敵愾心のために清国の病婦を捉へて、犯し辱めたる愛国の軍夫あり。

という(じょん・べるとん)の名による説明が、「夜行巡查」「外科室」とは、意味が異なるものだからである。

(じょん・べるとん)は、「海城発電」の作品世界で造型されたものの、そのエッセンスを述べたものであり、「化銀杏」もそれに当ると考える。これは万葉集における「長歌」に対する「反歌」を以ってするのと同じである。これは、芥川龍之介の作品(「鼻」「芋粥」など)や森鷗外の作品(「舞姫」「最後の一句」など)にもみられるものである。だが、「夜行巡查」「外科室」は、作品で造型したものとは、別の側面を(作者)が歌いあげているのであり、(作者)の説明部分にみられるものが、作品を書く意図であったのに、それが造型できなかつたための補足ではないかと思われる。当時(明治

28年)の小説技巧が文壇的レベルでどのくらいのものであり、鏡花がどの程度であったかを裏づける必要があるが、今はこれは不可能である。社会や宗教などに対して、単純率直に憤り、批判しているローマン主義的心情が、(作者)の説明に感じられるが、それは説明部分に止って、作品には造型されていないのである。いづれにしても、作者は自己の作品世界が、読者を説得するためのリアリティに欠けている、と自覚したためではないかと私は考える。

ここには、 $\wedge$ 外界 $\vee$ に背を向けて、自己の $\wedge$ 内面世界 $\vee$ に生きているという作品世界に、作者は不安をもっていたのでないかと考えられ、作者の文学姿勢を考える出発ともなるものだが、これは別の機会にゆずりたい。

6

鏡花の作品のいくつかについて、小説の構成要素である「人物」「事件」「背景」の三つの面から、私なりに考えてきたつもりである。三つのどれもが、一般社会から隔絶したもの、あるいは理解を超えるものであり、それらによって造型された世界は極めて独自のものであった。これを $\wedge$ 非現実世界 $\vee$  $\wedge$ 非社会的世界 $\vee$ と呼ぶこともできよう。しかし、これは本稿で扱った「夜行巡査」「外科室」「海域発電」「化銀杏」「高野聖」「歌行燈」の六つの作品に限っておきたい。そして

私は、こうした作品世界を、「泉鏡花だけの世界」とは考えたくない。六つの作品で造型した世界は、鏡花資質の所産であり、鏡花独特の世界であることはもちろんとしても、私は資質に大きな意味を持たせたくはない。むしろ、小説の方法が、作品世界を決定するのではないかと考えている。

注1 谷崎精二「小説形態の研究」(講談社)に紹介され

ている諸家の論述参照。

2 大野茂男「近代小説と職業」(明治書院)

3 坂本浩「高野聖」(解釈と鑑賞・昭和二十四年五月号)

— 開成高校教諭 —